図書館情報メディア研究第1巻2号35～47ページ　　2003年

# 松前藩出身の歴史学者池田晃淵書誌—経歴と事跡—

新藤　透*

# The bibliography of Japanese historian Ikeda Kouen from *MATSUMAE-HAN*—Career and Achievements—

Toru Shindo

本稿は、池田晃淵の事蹟—主として，歴史家としての活動—を明らかにし，且つ，彼の全著作に解題を付して，今日的意義を明らかにしたものである。

池田は，江戸後期の蝦夷地松前に生まれた下級藩士である。彼は幕末の藩の政争で，同志と共に，幕府方に味方しようとした主流派をクーデタで追い落として実権を握ったが，廃藩置県の際の疑獄事件で職を辞し，東京に出て，現在の東京大学史料編纂所の前身に勤務し，歴史家として活動を開始する。『史学雑誌』に，「本多正純改易始末」を発表するなど数々の論文を発表している。池田の活躍は明治中期で一旦終わるが，その後は「江戸時代を知る人物」として講演などを行い，『史談会速記録』のような回顧録雑誌に，数回に渡って寄稿している。幕末の松前藩の内乱や，樺太問題を取り上げた池田の研究は，当時，中央の歴史を構築する事に集中していた日本史学界ではあまり注目されるものではなかった。しかし戦後，地域史研究が推奨され，「北方史」という分野が成立するにおよび，池田の論考が注目されるようになるであろう。

The Japanese historian IKEDA KOUEN is dismissed existence at present. It is written at no kind of encyclopedia such as the Japanese history encyclopedia and the biographic dictionary. Therefore, I decided to examine his career and book one.

Ikeda was born in Matsumae in Ezochi in the latter period of Edo.

It remained as the post of the HAN after MEIJIISHIN, too. However, it fell by the scandal case from power in case of HAIHANCHIKEN.

Ikeda was Tokyo and got a job in the University of Tokyo Historiographical Institute. The life as the student of history in Ikeda started.He released a lot of papers.

In the middle of Meiji, it was absent from the activity temporarily but after that, it decided to lecture in the Edo period. The contents are MATSUMAE-HAN and Sakhalin in the latter period of Edo and so on. The contents were made sentences by the magazine. When the paper on Sakhalin is the research which is important at present, I am thinking.

It put a bibliography to all the book ones in Ikeda and mediating between the activity as his student of history by the contents of my paper.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

## 1．はじめに

近年，日本近代史学史の研究が盛んになりつつある。日本歴史学会は平成11年（1999）に『日本史研究者辞典』の編集を行い，吉川弘文館から刊行した(1)。また刀水書房からは，今谷明氏が中心となり編集した『20世紀の歴史家たち』が刊行中（既刊4冊）である(2)。

しかし，『日本史研究者辞典』はできるだけ網羅的というもので，完全版とはいえない(3)。当然，そこから漏れた研究者も数多くあると推察される。

筆者は先般，松前町町史資料室に史料調査に赴いた際，『池田晃淵履歴』という文書を見いだした。池田晃淵といえば是迄も度々目にしたことのある名前である。それが松前藩士であることが分かった。しかし，池田晃淵の名前は『日本史研究者辞典』はもとより，『国史大辞典』をはじめ，日本史辞典類，また明治期に刊行された人名辞典にも管見の範囲ではあるが，記載はなかった(4)。注目に値される人物と評価されなかったのであろうか。しかし池田は，明治末期に早稲田大学出版部から刊行された『大日本時代史』に2冊単著で執筆している。このことから判断して単なる歴史愛好家というレベルではなく，当時の日本史学界から「研究者」として認識されていたということが分かる。

池田は，江戸後期に松前藩の下級武士の家に生まれ，幕末維新期の混乱の中，戊辰戦争に新政府軍側として戦い，戦後は廃藩置県まで藩の実力者として藩政を指導した。しかし疑獄事件によって実権を失った池田は上京し，現在の東京大学史料編纂所に連なる組織に就職し，史料編纂に従事する。それと平行して独自に歴史学の研究にも取り組み，『史学雑誌』を中心に精力的に論文を発表し，後には早稲田大学で歴史学の講義を担当するまでになるのである。このような人物を世にしらしめることは日本近代史学史上有益なことであり，また，池田の故郷北海道松前町にとっては忘れられていた「郷土の偉人」の発掘は意義有ることであろう。

小稿ではそういう意味からこれまで注目されないできた歴史学者池田晃淵の事跡を史料上可能な限り明らかにしていきたいと思う。具体的には，①池田晃淵の全著作（単著・共著・研究論文など）を収集し，その解題を付し，研究の傾向を明らかにする，②池田の生涯は，何れの辞事典類にも記されていないことは前述した。従ってどのような生涯であったのか，まずは，史料上から確認することが重要であると思われるので，それを行いたい。これらの点を踏まえた上で，③池田とは，どのような歴史家であったのか明らかになるものと思われる。

## 2．池田晃淵書誌

### 2.1　池田晃淵書誌

#### 2.1.1　単著

池田が個人ですべて執筆したものを単著とした。(整理番号を1，2…とした。内容が同一で再刊されたものを1'と表記し，増補改訂版は新たに番号を付した)

1－1，2，3『大奥の女中』（上）（中）（下）　冨山房　1894．12　菊判紙装本文合計620頁図版3葉

読売新聞に連載されたものを増補改訂したものである。3代将軍徳川家光より6代将軍家宣までの江戸幕府大奥における将軍付中臈と上臈年寄を中心として幕府政治を概観したもので，女性の側からみた政治裏面史といった読み物のたぐいである。しかし幕府政治に大奥が影響を及ぼしているということを言及した初めての歴史書といえよう。

2『徳川幕府時代史』　早稲田大学出版部　1904．11　菊判本文1003頁図版1葉

池田が早稲田大学において講義した明治37年（1904）度歴史地理科第一学年講義録である。後に『大日本時代史』に収録される。

3『平安朝史』　早稲田大学出版部　1905　菊判本文722頁

池田が早稲田大学において講義した明治38年（1905）度歴史地理科第一学年講義録である。後に『大日本時代史』に収録される。

3'－1『平安朝史』　早稲田大学出版部　1906　菊判本文642頁

池田が早稲田大学において講義した明治39年（1906）度歴史地理科第一学年講義録である。後に『大日本時代史』に収録される。

4『大日本時代史　平安朝時代史』　早稲田大学出版部　1907．3　菊判本文636頁図版3葉

早稲田大学講義録を訂正して，早稲田大学出版部が編集した『大日本時代史』の一冊として刊行した。同叢書はわが国初の本格的な日本史全集である。

5『大日本時代史　徳川幕府時代史』　早稲田大学出版部　1907．4　菊判本文合計1003頁図版1葉

早稲田大学講義録を，早稲田大学出版部が編集した『大

日本時代史』の一冊として刊行した。

5'―1『日本近世時代史　徳川史』　早稲田大学出版部　1909．3　菊判本文1007頁図版1葉

『大日本時代史』の近世編3冊（『徳川幕府時代史』，『幕末時代史』，『維新時代史』）を独立して『日本近世時代史』全3巻として3ヶ月連続刊行した。内容は『大日本時代史』と全く同一である。

6『訂正増補大日本時代史　平安朝史』　早稲田大学出版部　1915　菊判915頁図版3葉

『大日本時代史』を増補改訂したもの。平安遷都からはじまり，源義仲の入京までを叙述した平安時代の通史である。主として政治史に重点を置いている。

7―1，2『訂正増補大日本時代史　徳川』（上）（下）1915．8／1916．1　菊判本文合計909頁図版5葉

早稲田大学歴史地理科講義録に講述したものを『大日本時代史　徳川幕府時代史』として1冊にまとめ，これを訂正増補して上下2冊に分かったものである。

慶長3年（1598）豊臣秀吉死去からはじまり，元和2年（1616）徳川家康の死までを創業期，2代秀忠の時代を創業守成の時期，3代家光・4代家綱の時代を守成期，5代綱吉から7代家継までを革新期，8代吉宗・9代家重の時代を革新の修正期，10代家治を無為時代，11代家斉・12代家慶の時代を幕府全盛期としており，各時代の幕府の政治外交を主として，若干精神文化にも及んでいる。

江戸時代の通史としては幕末が抜けているので整合性が良くない。当時としては史料を博捜し，文中に引用しているものが多く，池田が実証を重んじていたことが分かる。

1'『大奥の女中』　冨山房　1917．11　菊判本文576頁図版2葉

以前刊行された『大奥の女中』全3巻を一冊に合本したもので，内容的異同はない。

6'『日本時代史　平安朝史』　早稲田大学出版部　1926．11　菊判本文616頁

『訂正増補大日本時代史　平安朝史』を復刊したもの。内容は前著と全く同じ。装丁がハードカバーからソフトカバーに変化した。

7'―1，2『日本時代史　徳川幕府時代史』（上）（下）早稲田大学出版部　1927．2～3　菊判本文合計909頁図版1葉

『訂正増補大日本時代史　徳川』を復刊したもの。内容は前著と全く同じ。

### 2.1.2　共著

複数で共同執筆した著作物を共著とした。(整理番号ⓐⓑ…)

ⓐ池田晃淵／小倉秀貫共著『古今史譚』　春陽堂　1896　菊判本文1045頁

明治26年（1893）11月から同27年（1894）5月までに刊行された『古今史譚』全5巻を1冊にまとめたもの。主として戦国末期から江戸時代にわたる政治史上の俗説の誤りを歴史学的に研究したものである。当時の歴史学界は重野安繹・星野恒・久米邦武らが，庶民が親しんでいる史的事件をすべて俗説だとして批判し，『太平記』が史料として使用できないとされ，論争をよんだ時代である。本書もこういった流れに位置づけることができよう。

ⓑ池田晃淵／浮田和民共著『歴史講話』　早稲田大学出版部　早稲田通俗講話第5編　1906．12　菊判133頁図版2葉

雑誌『中等教育』第2期に載った講話を，早稲田大学出版部が『早稲田通俗講話』として刊行したものの1冊。本叢書の目的は「た易く且つ面白い学術書」であり，「家庭の読み物にも，初学の参考書にも成るようにした」(序)とあり，一般書である。

本書は日本の部（日本史）を池田晃淵が，西洋の部（西洋史）を浮田和民が担当している。池田は日本の部で「源頼朝の話」「源頼家の話」「源実朝の話」「楠公の話」「上杉謙信の話」「北条早雲の話」「織田信長の話」「徳川家康少時の悲況」を執筆している。

ⓒ今井徽／渋谷十郎／池田晃淵共編『故田崎東略伝』1916跋　和装44丁　半紙本袋綴

編者名は跋文による。出版地・出版者共に不明。私刊ではないかと思われる。田崎東（1843―1869）は松前藩士。箱館戦争中，藩主松前徳広を擁して転戦し，半年に及んだ。明治2年（1869）4月26日に旧幕府軍と交戦中重傷を負い，翌日戦死。共編者の今井，渋谷も共に松前藩士族である。

### 2.1.3　雑誌発表論文・研究ノート・史料紹介・随筆・「答問」

ここでは池田が雑誌に発表した歴史学に関係する文章を紹介する。内容別に研究論文としての水準に達しているものを論文（整理番号①②…）とした。速記録のようなものでも内容が高度なものに対しては論文に分類した。論文の水準にまで達していないものを研究ノート（整理番号 ab…），史料を紹介・解題したものを史料紹介（整理番号①②…），随筆的なものを随筆（整理番号ⅠⅡ…），『史学雑誌』にかつて存在した一般読者からの質疑応答の文章は，その当時の名称のとおり「答問」（整理番号Ⓐ Ⓑ…）とした。

論文①「後水尾天皇御譲位考」『史学会雑誌』第1編第8号　1890．7

今日では御水尾天皇が退位した理由は，幕府の紫衣事件の対応に抗議の意思を表明したことであるということで通説化されているが，池田のこの論文発表以前は，単なる天皇の横暴の故であったという俗説が巷間に広まっていた。池田は紫衣事件との関連を本論文で指摘し，天皇退位の理由を明らかにした。

史料紹介①「駿府政事録　付駿府記考」『史学会雑誌』第2編第15号　1891．2

史料「駿府政事録」の解題である。「駿府政事録」は徳川家康が駿府城に居住していた時期を知る恰好の史料である。

簡単な内容紹介・書誌的事項といった記述に終始しており，史料としての歴史学的価値などには言及されていない。

史料紹介②「東武実録考　付江城年録」『史学会雑誌』第2編第15号　1891．2

史料「東武実録考」の解題である。「東武実録考」は2代将軍徳川秀忠の事績を5代綱吉の命により松平忠冬が編纂した史料。

論文②「徳川氏上野宮取立の弁」『史学会雑誌』第2編第19号　1891．6

池田が明治24年（1891）5月9日に史学会例会で講演したものを活字化した。徳川将軍家がなぜ，東叡山寛永寺を新建し，京都から親王を迎えて門跡としたのか。当時，これは家康の遺言にあったもので，朝廷が幕府に対して謀反を起こしたときは門跡を還俗して即位させ，京都と対決させよという俗説が一般に広まっていた。池田は一々史料を提示して，その俗説を厳しく批判している。

史料紹介③「御撰大坂軍記〔河越道半覚書，大坂御陣山口休庵咄，北川遺書記〕」『史学会雑誌』第2編第20号　1891．7

8代将軍徳川吉宗が編纂させた大坂の陣の編纂物史料を解題したもの。

史料紹介④「山本日記〔山本豊久記〕，難波軍記」『史学会雑誌』第2編第22号　1891．9

山本豊久が書き記した日記「山本日記」の解題。「山本日記」は大坂の陣の経緯を記した史料。

研究ノートa「安国殿記を読みて疑を質す」『史学会雑誌』第3編第30号　1892．5

芝増上寺安国殿の縁起を記した「安国殿記」に対して史料批判を行ったもの。一次史料と「安国殿記」を比較してその相違点を箇条書きにしている。池田は最終的な結論は出しておらず，問題提起のままで筆を置いている。

随筆Ⅰ「渉史漫筆（詐欺師，播磨宮，棟瓦の恵比寿大黒）」『史学会雑誌』第3編第36号　1892．11

随筆である。括弧内上記の事項に対して史料上に表れた史実を紹介している。

研究ノートb「本多正純改易始末」『史学雑誌』第3編第37号　1892．12

本多正純が改易された理由について当時一般には，正純が将軍秀忠を宇都宮吊り天井で暗殺を計った嫌疑という理由が広まっていた。池田は反正純派の策動で，無実の罪で改易させられたと結論づけている。

「答問」Ⓐ「能登国に俊寛僧都の遺跡」『史学雑誌』第4編第38号　1893．1

このころの『史学雑誌』には，一般の読者から歴史事項に対しての質問を受け付ける「答問」というコーナーがあった。池田も上記の設問に対して回答している。能登に俊寛の遺跡があるという質問に対して，俊寛は鬼界ヶ島に配流されたのであり，池田は能登のものは同名異人のものであるか，後世の捏造であろうとしている。

「答問」Ⓑ「徳川氏は新田の胤，織田氏は平氏の胤，島津氏は源頼朝の胤」『史学雑誌』第4編第38号　1893．1

上記の質問に対して，池田は織田氏のみ平家の子孫で

ある可能性があると答え，後の2例は史料上極めて疑わしいとしている。

論文③「徳川氏施政の弛緩を評す」『史学雑誌』第4編第40号　1893．3

明治25年（1892）12月10日，史学会例会で池田が講演したものを活字化。徳川将軍15代を通観して，その施政の弛緩を論じたもの。これは『大日本時代史　徳川幕府時代史』の論旨と一致しており，その土台となったものと思われる。

随筆II「渉史漫筆（贋綸旨）」『史学雑誌』第4編第41号　1893．4

史料編纂中に気になったことを記すのがこの「渉史漫筆」のコーナーである。池田は「本光国師日記」元和元年（1615）6月6日条に見える綸旨を偽物であることを指摘している。

論文④—1「源通親の伝を読む（一）」『史学雑誌』第5編第2号　1894．2

論文④—2「源通親の伝を読む（二）」『史学雑誌』第5編第3号　1894．3

明治26年（1894）11月18日に史学会例会で講演したもの。源通親は鎌倉時代の公卿で，後鳥羽院政下，権勢を奮った権力者として当時イメージされていた。池田は真の通親とはどのような人物であったのかということを一次史料を博捜して論じている。

論文⑤—1「頼朝義経の不和に就て（一）」『史学雑誌』第6編第3号　1895．3

論文⑤—2「頼朝義経の不和に就て（二）」『史学雑誌』第6編第4号　1895．4

論文⑤—3「頼朝義経の不和に就て（三）」『史学雑誌』第6編第5号　1895．5

なぜ，源頼朝は異母弟義経と不和になったのか。当時，一般的には梶原景時や妻北条政子の讒言を真に受けた頼朝が義経を疑い，滅ぼしたというもので，「判官贔屓」のエピソードとなっていた。池田は「吾妻鏡」などの史料を駆使し，頼朝義経不和の原因として義経が頼朝の許可を得ずに叙位・任官したことを咎めたためとしている。頼朝は源氏政権内での秩序を保つため，種々の規則を定めたが，弟である義経が真っ先に破ったため，肉親だからこそ厳罰にしたと結論している。

既に，この論文が発表された時には久米邦武「太平記は史学に益なし」が発表されており，池田も『平家物語』などの文学作品を史料としては使用していない。

「答問」©「平維盛」『史学雑誌』第7編第2号　1896．2

「答問」のコーナーの一節である。質問は平維盛は壇ノ浦の戦いで討ち死にせず，紀伊熊野にまで逃れ，現在もその土地には維盛の子孫がいるという。これは事実かというものである。池田は種々の史料を提示してそれは誤りであると回答している。

論文⑥—1「承久の乱の起因に就て（一）」『史学雑誌』第7編第2号　1896．2

（後述）

「答問」Ⓓ「樋口兼光出生地」『史学雑誌』第7編第4号　1896．4

「答問」である。長野県伊那郡朝日村樋口が，源義仲の家臣樋口兼光出生地という伝承があるが，それは事実かという質問に対して，池田は樋口兼光の史料はほとんど残っておらず，出生地の確定は難しいとしながらも，樋口が兼光の出世地というのは史料上疑問としている。

論文⑥—2「承久の乱の起因に就て（二）」『史学雑誌』第7編第4号　1896．4

論文⑥—3「承久の乱の起因に就て（三）」『史学雑誌』第7編第6号　1896．

本論文以前には承久の乱（承久3年〈1221〉）について歴史学として議論されたことはなかった。池田は初めて承久の乱を研究し，その経緯を明らかにした。明治28年（1895）11月史学会で講演したものの活字化。

「答問」Ⓔ「徳川家康新西班牙に通商したる情況」『史学雑誌』第7編第8号　1896．8

「答問」である。徳川家康は「新西班牙」すなわちアメリカと通称を結ぼうとしたという。それは事実かという質問に対して池田は，田中勝助のノビスパン派遣について説明している。

史料紹介㊤「当代記考」『史学雑誌』第7編第10号　1896．10

史料「当代記」の解題。ここで紹介している「当代記」は永禄5年（1562）から慶長20年（1615）1月までの記録である。ただ，池田は「当代記」と同名の異本が数種類存在していることを確認し，写本の校合などを行った上でないと史料として活用できないとしている。

「答問」Ⓕ「四度の使」『史学雑誌』第7編第10号　1896．10

「答問」の一節。文部省検定試験本邦歴史問題に四度の使という一項があった。それはどのようなものかという質問。池田は四度の使とは古代，国司・郡司から主要な公文―正税帳・大計帳・調帳・朝集帳―を持参して京都に届ける役目の略称を「四度の使」と言っていると回答し，さらに史料上にみえる四度の使を紹介している。

史料紹介⑥「月堂見聞集」『史学雑誌』第8編第5号　1897．5

史料「月堂見聞集」の解題。編者は本嶋知辰。号を月堂という。月堂が見聞したものを記録したものである。宝永・享保期の世情を知るには恰好の史料としている。

論文⑦「徳川八代将軍の言行に就きて」『史学雑誌』第8編第6号　1897．6

史学会での講演らしいが，講演年月日は記されていない。8代将軍徳川吉宗の発言を史料から拾ってまとめたもの。農政・朝幕関係などについて。

「答問」Ⓖ「田租を算ふる把束の分量につきて」『史学雑誌』第8編第7号　1897．7

「答問」の一節。大宝律令に田租を数えるのに把束の名称がある。古代に一把というのは一定の分量があるのかどうかという質問に対して，池田は田租の制は大宝律令以前にも存在したことを指摘し，大宝律令原本は伝来していないとしながらも，『令義解』・『拾芥抄』から大宝律令の度量衡を引用し，紹介している。

「答問」Ⓗ「葛岡宣慶卿伝」『史学雑誌』第8編第8号　1897．8

これも「答問」の一節。葛岡宣慶という堂上公家の伝記はないか，この公家は慶安頃に大坂に居住していた人物らしいという質問に対して池田は，葛岡家の系図，宣慶の事績を略述しているが，偉人ではないので，詳しくはわからないとしている。

論文⑧「東福門院御入内に就きての考」『史学雑誌』第9編第4号　1898．4

東福門院和子の入内についての論文。武家から皇室への入内については平清盛の娘建礼門院以来の事なので，池田は東福門院と建礼門院を比較して論じている。

随筆Ⅲ―1「秋田県下史料採訪の概況（一）」『史学雑誌』第10編第4号　1899．4

随筆Ⅲ―2「秋田県下史料採訪の概況（二）」『史学雑誌』第10編第7号　1899．7

池田が明治31年（1891）7月17日から8月10日まで秋田県に出張し，史料調査を行った模様が報告されている。

論文⑨「維新前後松前藩王事勤労事蹟附一三節」『史談会速記録』第117輯　1902．8

史談会はすでに忘れ去られようとしていた江戸時代のエピソードを，記録にとどめておこうと発足した会である。

これは旧松前藩士であった池田が，松前藩はいかに天皇に対して「勤皇の精神」をもっていたかを述べたものである。最後に出席者との質疑応答までを速記している。

論文⑩「安政年間露人北蝦夷占居の概況附二節」『史談会速記録』第118輯　1902．9

安政元年(1854)，ロシア人ネベリスコイの樺太島クシュンコタン占拠事件を題材に講演したものの速記録。池田は当時，まだ少年であったが，後に独自に調査したらしく，その占拠当時の松前藩の動向が語られている。

論文⑪「函館五稜郭建築の次第及松前家の斡旋附五節」『史談会速記録』第119輯　1902．10

箱館五稜郭の設計・建築の話題から松前城のことなど，幅広く語っている。話の全体としてまとまりがない。

論文⑫「松前藩維新前後の国情及戊辰戦争の実況附九節」『史談会速記録』第133輯　1903．12

松前藩も多くの諸藩と同様に明治維新前後には新政府軍につくか，旧幕府軍につくかで内乱が勃発していた。その模様と，最終的に新政府軍に味方した松前藩が榎本軍との戦闘で敗退する模様を語っている。

論文⑬―1「松前藩樺太交通事情附一三節」『史談会速記録』第156輯　1906．2

論文⑬―2「松前藩樺太交通事情（前号の続）附二五節」『史談会速記録』第157輯　1906．3

松前藩と樺太との関係の史料上の初見を，永正17年（1520）の事であるとし，幕末の樺太クシュンコタンのロシア人占拠事件までを話し，後半は寛政元年（1789）に勃発したクナシリ・メナシの戦いを語っている。前半部の松前藩―樺太関係史はこのテーマでのはじめてのものといえる，今日でも近世樺太史を知る上で貴重な論考といえる。

論文⑭「松前勘解由之来歴附三〇節」『史談会速記録』第174輯　1907．8

幕末維新期の松前藩の重臣松前勘解由が，不正を働き，取り調べ蟄居中に死亡したという事件について考証している。その他，松前藩主のエピソードなどを話している。話としてまとまりにかける。

論文⑤「頼朝義経の不和に就て―史学雑誌より―」『頼朝会雑誌』第11号　1934．10

『史学雑誌』第6編第4，5，6号の再録

### 2．2　池田晃淵の研究の傾向

単著は，何回も版を変え，また増補版も出版されているが，本質的には『大奥の女中』・『平安朝史』・『徳川幕府時代史』の3種類と判断できよう。共著は3冊，論文は14本，史料紹介は6本，研究ノートは2本，随筆は3本，「答問」は8本となっている。ここでは，これらの池田の研究を，研究対象の時代区分別，研究発表の時期別変遷を簡単に纏めておくことにする。

#### 2．2．1　時代区分別変遷

この時代の歴史家は多くの場合，前近代（古代・中世・近世）全てを研究対象にしていた。池田もその例外にもれることなく，前近代すべてに渡って研究業績を残している。ここではその傾向を明らかにしたい。

まず，古代史に関しては，単著1種類，「答問」2本といえる。具体的には，単著は『平安朝史』，「答問」は「四度の使」・「田租を算ふる把束の分量につきて」である。

中世史は，共著1冊，論文3本，「答問」3本と分類できる。具体的には以下のようになる。共著『歴史講話』，論文「源通親の伝を読む」・「頼朝義経の不和に就て」・「承久の乱の起因に就て」，「答問」は「能登国に俊寛僧都の遺跡」・「平維盛」・「樋口兼光出生地」である。

最後に近世史に関して言えば，単著2種類，共著2冊，論文11本，史料紹介6本，研究ノート2本，「答問」3本となっている。具体的には以下の通りである。単著『大奥の女中』・『徳川幕府時代史』，共著『古今史談』・『故田崎東略伝』，論文は「後水尾天皇御譲位考」・「徳川氏上野宮取立の弁」・「徳川氏施政の弛緩を評す」・「徳川八代将軍の言行に就きて」・「東福門院御入内に就きての考」・「維新前後松前藩王事勤労事蹟附一三節」・「安政年間露人北蝦夷占居の概況附二節」・「函館五稜郭建築の次第及松前家の斡旋附五節」・「松前藩維新前後の国情及戊辰戦争の実況附九節」・「松前藩樺太交通事情」・「松前勘解由之来歴附三〇節」，史料紹介は，「駿府政事録　付駿府記考」・「東武実録考　付江城年録」・「御撰大坂軍記〔河越道半覚書，大坂御陣山口休庵咄，北川遺書記〕」・「山本日記〔山本豊久記〕，難波軍記」・「当代記考」・「月堂見聞集」，研究ノートは，「安国殿記を読みて疑を質す」・「本多正純改易始末」，「答問」は，「徳川家康新西班牙に通商したる情況」・「葛岡宣慶卿伝」である。

一見してわかるように，前近代全ての時代に渡って研究対象としているが，近世が突出して多くなっている。池田は歴史家として近世史に力を入れていたといえる。

#### 2．2．2　研究発表の時期別変遷

池田晃淵の歴史学研究が，時期によりどのように増減があるのか，それをここでは簡単に纏めてみたい。

明治23年（1890）論文1本（近世史1本）・計1本，明治24年（1891）論文1本（近世史1本）・史料紹介4本（近世史4本）・計5本，明治25年（1892）研究ノート2本（近世史2本）随筆1本・計3本，明治26年（1893）論文1本（近世史1本）・「答問」2本（中世史1本・近世史1本）・随筆1本・計4本，明治27年（1894）単著1種3冊（近世史3冊）・論文1本（中世史1本）・計2本，明治28年（1895）論文1本（中世史1本）・計1本，明治29年（1896）共著1冊（近世史1冊）・論文1本（中世史1本）・史料紹介1本（近世史1本）・「答問」4本（古代史1本・中世史2本・近世史1本）・計7本，明治30年（1897）論文1本（近世史1本）・史料紹介1本（近世史1本）・「答問」2本（古代史1本・近世史1本）・計4本，明治31年（1898）論文1本（近世史1本）・計1本，明治32年（1899）随筆1本・計1本，明治35年（1902）論文3本（近世史3本）・計3本，明治36年（1903）論文1本（近世史1本）・計1本，明治37年（1904）単著1冊（近世史1冊）・計1本，明治38年（1905）単著1冊（古代史1冊）・計1冊，明治39年（1906）単著異版1冊（古代史1冊）・共著1冊（中世史1冊）・論文1本（近世史1本）・計3本，明治40年（1907）単著2冊（古代史1冊・近世史1冊）・論文1本（近世史1本）・計3本，明治42年（1909）単著異版1冊（近世史1冊）・計1本，大正4年（1915）単著増補訂正版2種3冊（古代史1冊・近世史1種2冊）・計2本，大正5年（1916）共編著1冊（近世史1冊）・計1本，大正6年（1917）単著異版1冊（近世史1冊）・計1本となっている。

池田は大正9年（1920）に死去しているので，以降は死後異版・再録されたものである。大正15年（1926）単著異版1冊（古代史1冊）・計1本，昭和2年（1927）単著異版1種2冊（近世史1種2冊）・計1本，昭和9年（1934）論文再録1本（中世史1本）・計1本となってい

る。

池田は，当時唯一存在していた歴史学の学会である『史学会』に創立当初から加入し，毎年少なくとも一本は論文を発表している。最盛期は明治20～30年代半ばまでであろう。この時代は，歴史家池田にとって脂ののった時代といえよう。内容は，政治史を中心としており，そして俗説の排除を目的としていた。明治35年（1902）から同40年（1907）まで，江戸時代の回顧談的雑誌である『史談会速記録』に，幕末維新期の松前藩の動向についての講演速記を収録している。この6本は，池田が体験した同時代のことではあるが，当時の史料を読解し，史実を確定させることに力を注いでいる。内容的には幕末の北方問題―カラフトのロシア人占拠事件―や，松前藩内の政争，戊辰戦争で藩として如何に「勤王精神」を持っていたのか等の，今日で言えば「近世北方史」の領域に属するものである。

明治後期に，平安時代と江戸時代の概説書を刊行した。大正時代，研究活動は行っていないようだが，最晩年の大正6年に，最後の著作を刊行している。それは，箱館戦争で共に松前藩士として戦い戦死した，田崎東の伝記の編纂であった。

### 2.2.3　歴史家池田晃淵の研究上の特徴

以上，「はじめに」で示した①の検討を行ったわけであるが，結論としては，池田晃淵は近世政治史を中心に研究を進めた歴史学者であったといえる。研究の目的としては，一貫したテーマを持ち，それに関する論文を体系的に執筆したというわけではなく，世間一般に定着していた俗説を正し，正確な事実関係を提示するというものであると思われる。

次に，池田晃淵とはどのような生涯を送ったのか，それを具体的にみていきたい。

## 3．池田晃淵の経歴

### 3.1　池田晃淵に関する史料

ここでは池田晃淵の経歴を概述するにあたって使用する史料について簡単に解説を加えたい。というのは，池田は前述したように今日の日本史学界からは殆ど忘れられた存在であり，これらの史料も今まで紹介されることはなかった。

#### 3.1.1　『池田氏由緒略書』（明治24年頃）

松前町町史資料室に所蔵されている史料である。全13丁。写本であると思われる。はっきりとした成立年代はわからないが，記述が明治24年（1891）で途絶えているため，その後の成立と思われる。「由緒書」とされているが，名前と没年のみの記述であり，家譜といったほうが妥当である。池田晃淵自身の記載はないが，父，祖父と思われる人物が確認できる。本史料の他に池田氏の家譜は確認できていない。

#### 3.1.2　『池田晃淵履歴』（明治4年）

『池田晃淵履歴』は現在北海道松前町町史資料室に所蔵されている史料である。本史料は北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の写本をマイクロ撮影したものを印刷したものである。全5丁。毛筆で書かれ漢字仮名交じり文を用いて記されている。『池田晃淵履歴』という題は松前町町史資料室が便宜的に付けたものであり，内題・外題などは特に見あたらない。

明治4年（1871）に明治政府は廃藩置県を行い，すべての藩は廃止された。それに伴い藩士の家禄・賞典録を藩主に報告させた。館藩（維新後，松前藩は城を館に移し館藩となっていた）も藩士に藩主松前修広へ廃藩置県までの履歴を報告させていた。館藩士であった池田晃淵もこのような経緯で履歴を残しているのである。

『池田晃淵履歴』は祖父・父の姓名，池田自身の生年月日・出生地がはじめに記されている。記述は明治元年（1868）10月18日に側用人として出役したことから，廃藩置県後の明治4年9月に館県が弘前県に合併したことまでで終わっている。

#### 3.1.3　『修史官員履歴　池田晃淵』（明治10年）

本史料は東京大学史料編纂所が所蔵しているものである。太政官修史館が明治10年（1877）1月に設立され，職員の履歴書を提出させた。そのときの池田晃淵の履歴である。毛筆・漢字仮名交じり文で記されている。

明治3年（1870）閏10月の館藩権大参事任命から同10年1月に修史館八等掌記になるまでを書いている。記述は『池田晃淵履歴』よりも簡略であるが，それを引き継ぐ史料として評価できよう。明治3年閏10月から同4年9月までは『池田晃淵履歴』と重複する部分であるが，両史料の異同は全くない。

#### 3.1.4　『史料蒐集復命書』（明治31年）

本史料は東京大学史料編纂所が所蔵しているものである。史料編纂所はその前身である太政官正院歴史課の伊藤十郎平が明治6年（1873）に茨城県に史料採訪に赴いて以来，地方に職員を派遣していた。初期の頃は関東地方が主体であった。明治26年（1893）に帝国大学臨時編

年史誌編纂掛が廃止されると史料調査も中断されたが，同28年（1895）4月に文科大学史料編纂掛が設置されると史料採訪も再開され，それ以降は史料採訪も全国各地を対象とするようになった。池田晃淵も明治31年(1898)7月17日から8月10日にかけて秋田県に出張し県下を広く採訪して回っている。本史料は調査が終わった後，池田が明治31年9月19日に史料編纂掛に提出した報告書である。

史料採訪はあらかじめ県庁に打診しておき，県庁はさらに郡市町村役場に史料の所在地を確認させておいておき，満を持して中央から担当官が派遣されるというものであった。池田の秋田県調査も例外ではなく，秋田県参事官宮治澤七郎，県属飛田謙蔵等の下調査の後に，彼らの案内で池田が現地に足を運んでいる。調査地域は秋田市，南北・秋田・山本・鹿角4郡を回り，再び秋田市に戻り，帰京の途中由利・雄勝・平鹿・仙北4郡を巡回した。実際の史料名はあげていないが，佐竹氏の史料を中心に調査したようである。池田の感触によれば秋田県は古代から歴史上著名な土地であるが古くから戦乱が多く，また火災も頻発していたため旧家もあまり古い史料を所持していないとし，今回は県中心部で終了したが，山間僻地を焦点にした細かい調査が今後必要と報告している。なお，本史料は史料編纂掛内部の報告書であるが，一般には『史学雑誌』で2回にわたり報告している。

明治期には史料採訪がどのように行われていたのかその実際を窺う貴重な史料であると思われ，史学史的価値は大きいと思われる。

### 3.2　池田晃淵の経歴

#### 3.2.1　出生地とその係累

『池田晃淵履歴』によると池田晃淵は弘化4年(1847)，松前福山に生まれた(5)。祖父池田繁右衛門，父の名も池田繁右衛門と記されている。長男である。母の名前は書かれていない。通称は弦衛。

松前藩士池田氏の系図は松前町町史資料室に『池田氏由緒略書』（明治24年〈1891〉頃成立）がある。由緒略書とされているが名と没年のみの記述であり，事績などは全く書かれていない。これによると池田氏の先祖は後北条氏であるとされ，「北条安房守某」とある。実際の祖は「道照」で寛文13年（1673）1月2日に84歳で死去とある。松前氏に仕官した初代「松前祖」と記されているのは道照から数えて9代目の「信央」であり，文政3年(1820)12月18日に66歳で死去とある。信央がどのような事情で松前藩に召し抱えられたかは不明である(6)。田村安蔵氏によると松前池田氏は，南部易国間村（現・青森県下北郡風間浦村）住の知義の二男信央が天明2年（1782）蝦夷松前に渡り，創設したとされている(7)。晃淵の叔父に，幕末維新期に北方地域で活躍した俳人池田亜喃(本名晃能)がいる。

明治24年頃成立なので，死亡者のみが記載されている『池田氏由緒略書』には晃淵の名はないが，「晃然　又勝太郎繁右衛門」とあり「明治六癸酉年七月二日　於東京卒去　五十六歳」と書かれており，その父も「晃定　又伝次郎繁右衛門」とあるのでこの晃定・晃然が晃淵の祖父と父のことであろう。

#### 3.2.2　藩士時代

維新前後のこの時期，松前藩も同時代の多くの藩と同様に新政府に味方するか，旧幕府軍に加わるかで藩論は二分していた(8)。藩上層部の家老松前勘解由らは旧幕府寄りの姿勢を示していた。慶応4年（1868）閏4月に新政府寄りの中心グループ「正義士」は勤王を掲げてクーデタを起こし松前勘解由ら重臣を失脚させ，藩の実権を掌握した。池田も正義士に所属していたらしい。というのは後年，指導者であった下国東七郎と共に藩の重職に任命されているからである。この藩情が落ち着かないうちに榎本武揚率いる旧幕府軍が蝦夷地に上陸し，松前藩は完敗し松前城も陥落してしまう。藩主松前徳広は築城中であった館に篭もるが，そこもまもなく落城し，徳広と正義士は津軽に海路逃れる（明治元年〈1868〉10月19日）。その船中で徳広は病死し，修広が藩主の座に着く。

さて以上のような情勢の中，池田は東京（慶応4年7月に改称）に滞在しており明治元年10月18日に目付役から御用人に就任している(9)。海路，下国東七郎は東京に向かい池田にこのことを伝え，池田・下国両名は同12月1日に旧幕府軍に敗退し，津軽に逃れている藩主を救援するために軍務官副知事大村益次郎に新政府軍の派兵を要請している。同月4日に東京駐屯の松前藩兵が出陣し，池田もそれに従い9日に青森に海路で到着している。池田はさらに単独で弘前へ行き，そこで御用人を免ぜられ，目付役に戻っている。翌2年（1869）2月27日に青森に帰着している。その間，京都守備の役に就いていた松前隆広は手勢を率いて出陣し，同1月22日に既に弘前に入っており，また下国東七郎も東京駐屯の兵32名と共に青森に入り松前軍に合流している。

明治2年3月10日に新政府軍に対して，青森に集結している松前軍は編成表を提出する。青隊・緋隊・白隊に別れ，池田も緋隊に所属し，以後各地に転戦しながら箱館に入る。同5月18日に箱館五稜郭が陥落し，榎本武揚は降伏した。池田は同月25日に松前隆広の本隊と共に松

前に「凱旋」している。

明治2年6月24日の版籍奉還により松前藩主松前兼広は知藩事となる。それに伴い家老を管轄，御用人を督事に改称された。池田も督事兼公議人に就任した（同8月には督事は参政と役名が改称された），同9月には兵制がフランス式になるに従い，その取調掛に就いている。明治3年（1870）に松前藩は城下を館に移し，館藩となるが池田はその「権大参事」となっている。これは同9月10日に，明治新政府は藩知事―大参事―少参事と藩の職制を変更したことによるものである。そして，明治4年（1871）7月14日に廃藩置県により館藩はなくなり館県となるが，役職はこれまでの通りで変化はなかったが，藩知事松前兼広は解任されたままで，県令は空席であった。

池田と館県大参事下国東七郎と連署で開拓使長官東久世通禧に開拓使との合併の上表を出すが，認められなかったようである。館県は明治4年9月5日に弘前県に併合された。しかし，職制は旧館県と同じであり，移管されただけであった。

明治4年12月3日に下国東七郎と共に外国商社からの借財一件について大蔵大輔井上馨から判理局に出頭を命じられ，その後同月12日に下国と池田らは旧藩在任中，外国商社から米と金を借り入れて藩用に供給したのは制規の法令に違反したものとして各々贖罪金4両2分の支払いを命じられた(10)。池田が書いた履歴書にはこのことは記されていない。

尚，旧館県領は弘前県から開拓使函館支庁に移管され，函館県になり，明治19年（1886）1月26日に北海道庁が発足し，現在に至っている。

### 3.2.3　歴史家の時代―史料編纂所期

明治2年（1869）4月，政府は，六国史に続く修史事業をスタートさせた。今日の『大日本古文書』・『大日本史料』に続く一大計画である(11)。同月制定の太政官制では大学校別当が「国史を監修」するとされ，10月に大学校に国史編修局が開設されたが，事情は不明だが12月には閉鎖され，同3年（1870）2月に太政官正院に記録編輯掛が設置され，同5年（1872）10月に歴史課・地誌課が設置された。

池田は明治7年（1874）6月7日に太政官正院歴史課（後の東京大学史料編纂所につながる）に十四等出仕として史料の編纂に従事しはじめる(12)。池田の歴史家としての生活が始まるわけであるが，どのような経緯でこの職に着いたのか，その事情は不明である。

太政官正院歴史課は明治8年（1875）に太政官正院修史局として拡大改組され，100名を越える体制となった(13)。池田も十三等出仕になり，図書掛に命じられている。明治10年（1877）1月18日に修史局は廃止され，太政官修史館となり，さらに人員を増やし拡大された。池田も八等筆記となり，第十一局図書掛に任命された。その後，池田は局をほぼ1年ごとに異動し，七等掌記までになるが，明治19年（1886）1月に修史館は廃止されて，内閣臨時修史局になり，明治21年（1888）10月に臨時修史局は廃止され，史料編纂事業は帝国大学に移管されて，帝国大学臨時編年史編纂掛が設立された。池田はめまぐるしいこれらの変遷に伴って異動している。帝国大学では書記という身分であった。その間，明治22年（1889）11月に史学会が発足し，同12月に『史学会雑誌』（明治25年〈1892〉12月に『史学雑誌』と改称，現在に至る）が創刊されている。池田は明治22年に入会し，明治35年（1902）12月まで史学会に在籍している。明治23年（1890）7月に『史学会雑誌』に第1号論文「後水尾天皇御譲位考」を発表している。

帝国大学臨時編年史編纂掛は明治24年（1891）に帝国大学文科大学史誌編纂掛となって，正式の組織となった。池田も依然として書記で勤務している。しかし，史誌編纂掛は明治26年（1893）4月で廃止される。

編纂事業は続けられていたようだが，正式ではなく，明治28年（1894）に帝国大学文科大学史料編纂掛が設立されると池田も復帰し，史料編纂助員という待遇になる。史料編纂掛が設立される間の2年ばかりどのような生活をしていたのかは不明であるが，明治27年（1893）には『史学雑誌』に2本論文を発表している。また，池田はこの年には初の単行本『大奥の女中』全3冊を冨山房から刊行している。この本は「読売新聞」に100回ほど連載したものを増補訂正したものであるという。このことから在野の研究者として歴史研究に従事していたことは間違いないと思われる。

史料編纂掛に復帰した池田は精力的に論文を発表している。また，この年の7月17日から8月10日まで秋田県で単独で史料調査を命じられている(14)。その模様は『史学雑誌』に2回にわたって発表された。明治33年（1900）には史料編纂助員という身分はなくなり，史料編纂員となり，池田もそれに伴っている。

### 3.2.4　歴史家の時代―在野の時代

明治36年度（1903）の職員名簿には記載がないので，池田は史料編纂掛を退職したということが分かる(15)。明治37年（1904）7月刊行の早稲田大学講義資料として池田の単著である『徳川時代史』が刊行されているところ

から，おそらく早稲田大学で教鞭を執っていたのではないかと推察される。ただ，早稲田大学の大学史（早稲田大学史編集所・編『早稲田大学百年史』全6巻　早稲田大学出版部　1978—97）では正教員しか名前が記載されておらず，これに池田の名前が見えていないので非常勤講師か何かではないかと思われる。このあたりの事情は早稲田大学の内部資料で明らかになるかも知れない。明治38年（1905），同39年（1906）度の早稲田大学歴史地理科の講義資料としてこれも池田の単著である『平安朝史』が出版されているので，池田は，同40年（1907）まで早稲田大学で講義をしていた(16)。その後池田は史料編纂掛に復帰したが，すぐ辞職している。

池田の雑誌発表論文は明治40年（1907）8月の『史談会速記録』に発表した「松前勘解由之来歴附三〇節」を最後に途絶えている。しかし単行本は大正4年（1915），同5年（1916）の『訂正増補大日本時代史　徳川』（上）（下）までである。しかしこの本は明治40年刊行の『大日本時代史　徳川幕府時代史』を訂正増補して上下2巻にしたものなので池田の歴史研究は明治40年までといえよう。それ以降の活動は全く不明である。

栗田元次氏によると，池田は大正9年(1920)，70歳で死去となっているが(17)，弘化4年（1847）出生と『池田晃淵履歴』に記されているので満年齢で73歳であると思われる。没年地，墓所などの所在は目下のところ不明である。今後の課題となろう。

「はじめに」で示した②の検討を行ったわけであるが，池田の生涯は，下級藩士→館藩の要職→疑獄事件で失脚，上京→歴史学者とめまぐるしく変転しており，なかなか波乱にとんだ一生だったと思われる。

## 4．歴史学者池田晃淵の研究の性格

### 4.1　明治中期の歴史学界

池田晃淵が歴史家として活躍していたのは，明治20～30年代で，主に日本近世政治史を研究対象としていたことは前述した。それでは池田が活躍していたこの時代は，歴史学界ではどのような動向が見られたのだろうか。それをここでは簡潔に記したい。

日本初の歴史学の学会組織である「史学会」が創設されたのは，明治22年（1889）11月であった。その前後から歴史学の重鎮として重野安繹（史学会創設に伴い，帝国大学文科大学教授）は，「世上流布ノ史伝多ク事実ヲ誤ルノ説」（明治17年〈1884〉2月学士会院講演）や，「学問は遂に考証に帰す」（明治23年〈1890〉3月同上講演）などの講演活動を行い，歴史学の研究手法は，巷間の俗説を排除し，厳密な史料批判の上で導き出された史実を追求することにあるとした。考証を中心とする「考証主義」を打ち立てたのである。重野が一般から「抹殺博士」と呼ばれていたのもこのような研究を量産したわけであり(18)，今日のように「現代の課題に歴史学はどう答えるのか」といったような要請はなかったのである。

明治28年（1895）4月，帝国大学文科大学に史料編纂掛が設置され，星野恒・三上参次・田中義成などの歴史学者が史料編纂委員に任命された。史料編纂掛の方針は，国政の推移を中心とする編年型政治史・外交史を基本とするものであった。

これらの歴史学界の動向と池田晃淵の研究傾向はどう影響しているのだろうか。次にそれを検討したい。

### 4.2　研究の傾向

池田晃淵の歴史学者としての仕事は広範囲に及んでいる。明治20～30年代は日本史学界においては古代史・中世史・近世史・近代史・現代史などの時代区分は存在せず，歴史家は基本的に明治以前の前近代すべてを研究対象としていた。池田もその例にもれず，今日でいう古代史・中世史・近世史に関する業績を残している。

池田の古代史の業績として纏まったものに早稲田大学出版部から刊行された『平安朝史』がある。近世史は『大奥の女中』，『徳川幕府時代史』が主要なものといえよう。まず，単著に関していえば，『大奥の女中』は『読売新聞』に連載したものを単行本として纏めたものであって一般書である。『平安朝史』・『徳川幕府時代史』は，早稲田大学の講義録を元に著されたものであり，政治史を中心とした概説書である。いずれも専門的な学術書というものではないが，史料を着実に読み込み，それを基に史実を確定させた上で叙述を行っている。特に後者の二書はその性格が強く感じられる。

概説書は，現代では史実を確定させた上に，それが歴史学的にみてどのように位置づけることができるのかを重要視するが，池田はあくまでも事実関係のみを正確に書くことに力を入れている。

論文は，近世史が最も多く，ついで中世史，古代史の順に多い。これも世間一般に広まっている俗説を，極力一次史料を博捜して史実を再現して，排除することに力を入れている。内容的には政治史が多いように感じられる。史料紹介・研究ノートもそのような俗説排除のための研究の一環として良質な史料を提示しようと言う試みがみられる。

「答問」のコーナーは，現在の『史学雑誌』にはみられないものであるが，一般読者から歴史上の疑問点に対して専門の歴史学者が回答するというものである。池田もその回答者として参加しており，個々の記事の紹介は前述したとおりであるが，ここは古代史の質問が最も多く，中世史がそれに次いでいる。やはり一般読者からの歴史に関する疑問点を解消することで，正確な歴史知識を世間に広めようという当時の歴史学界の風潮を，如実に表しているコーナーといえよう。

ここで「はじめに」で提示した③の結論を出さねばならないが，それは以下のように指摘できよう。単著・共著・論文・「答問」などに共通してみられることは，厳密な史料批判を行い，俗説の誤りを正すというものである。池田が活躍した時代は，前述したように徹底した考証主義であった。特に，奉職していた史料編纂掛は，政治史・外交史中心であることも指摘したとおりである。池田の研究傾向が，近世政治史中心であり，史料批判に重点を置いていたことは，そのような時代背景，史料編纂掛の信条と合致しており，彼の研究は重野の確立した考証主義重視の系譜に連なるものといえよう。

史料編纂掛を辞した後，池田は『史談会速記録』に幕末期松前藩の動向とカラフトの様子についての講演速記を掲載した。最後に，この中から「松前藩樺太交通事情」を摘出し，今日の近世北方史の研究史上，どのように位置づけることができるのか若干検討したい。

### 4.3　「松前藩樺太交通事情」の位置づけ

本論文は『史談会速記録』第156輯，第157輯の2回に渡って発表された。厳密にいえば論文ではなく，速記録であるが，池田が史料を読解し，見解を述べている箇所が多いと判断したので論文とした。その内容を概観してみたい。

第1回目は，樺太と松前藩との関係の端緒は永正17年（1520）からであると指摘し，樺太という名称の語源，天和・正徳年間という史料が著しく少ない近世初期の樺太駐留の勤役の生活の実態，カラフト・アイヌと大陸との交易―いわゆる山丹交易―の情況など，多角的に樺太について説明している。第2回は最上徳内，間宮林蔵の樺太探検の模様から幕末安政年間の日露雑居情況まで言及している。

明治期の樺太を扱った研究は，考古学や古代史関係を除いては，明治37年（1904）に中村善太郎が『千島樺太侵略史』を発表し，同38年（1905）には松永聴剣が『樺太及勘察加』を出版しているが，これらの研究は日露関係史が主眼であり，樺太現地の情況については詳しく書かれてはいない。池田の論文の他には，樺太現地の状況を研究したものとして，早い研究としては明治42年(1909)に小川運平が『樺太及満州』を刊行し，その中でアイヌと大陸との山丹交易の様子が詳細に検討されている。池田の論文はかなり概説的であるとはいえ，樺太現地の歴史が叙述されており，研究としては最初のものであると思われ，今日の近世樺太史研究の嚆矢として評価できよう。

## 5．おわりに

歴史学者池田晃淵について，①②③について検討してきた。小稿では，総合的に，全体像を若干試論的に提示したにすぎず，更に細かく多面的に池田晃淵とはどのような人物であったのか研究される必要があろう。

例えば，明治維新後の館藩内での位置づけ，廃藩置県の際の疑獄事件の役割などである。今回は，歴史学者としての側面に光をあてたが，今後も近代日本史学史上での位置づけなども改めて追究される必要がある。また，最後に簡潔に述べたが，池田が行った北方史の研究が，今日でも十分先行研究として活用できると思われるので，研究史上どのような意義が池田の研究にあるのか，検討される必要があろう。

小稿が，以上のような研究の嚆矢として活用されれば幸いである。

〔付記〕本稿作成を前に北海道松前町教育委員会文化財課澤田宣康氏にご協力いただきました。記して謝意を表す次第です。

## 〔註〕

(1) 日本歴史学会・編『日本史研究者辞典』吉川弘文館 1999.

(2) 今谷明・大浜徹也・尾形勇・樺山紘一氏が編者となり，第1巻と第2巻の日本編で日本史研究者の略伝を収録している．第3巻と第4巻では世界編として尾形勇・樺山紘一・木畑洋一氏が編者となり外国人も含めて世界史の研究者の略伝を掲載している．第5巻目は日本編続として編集中である（2004年1月現在）.

(3) 『日本史研究者辞典』の収録選定基準は「序」によれば2000名あまりをリストアップしたがそこから「生没年不明者，経歴が明らかでない人物については残念ながら割愛せざるを得なかった.」（2頁）とし最終的に1,253名を収録している.

(4) 日本史辞典では，①国史大辞典編集委員会・編『国

史大事典』第1巻（吉川弘文館　1979），②日本歴史大辞典編纂委員会・編『日本歴史大辞典』第1巻（河出書房1968），③京都大学人文学部国史研究室・編『改訂増補日本史大辞典』（創元社　1962），④『日本史大辞典』第1巻（平凡社　1992），⑤朝尾直弘／宇野俊一／田中琢・編『新版日本史辞典』（角川書店　1997），⑥藤野保・編集代表『日本史辞典』（朝倉書店　2001），⑦日本史広辞典編集委員会・編『日本史広辞典』（山川出版社　1997），⑧永原慶二・監修『岩波日本史辞典』（岩波書店　1999），⑨『日本歴史大事典』第1巻（小学館　2000）を調査した．人名辞典では，①臼井勝美／高村直助／鳥海靖／由井正臣・編『日本近現代人名辞典』（吉川弘文館　2001），②『明治人名辞典』全6巻（日本図書センター　1987），③『講談社日本人名大辞典』（講談社　2001），③『明治大正昭和東京人名録』全3巻（日本図書センター　1989），④大日本人名辞書刊行会・編『大日本人名辞書』第1巻（講談社　1937），⑤『日本人名大事典』第1巻（平凡社1937）などを調べ，また北海道地方に特定した人名辞典として，①河野常吉『北海道史人名字彙』第1巻（北海道出版企画センター　1979），②北海道新聞社・編『北海道歴史人物事典』（北海道新聞社　1993）を引いたが，いずれの辞事典類にも池田晃淵の項目を見いだすことはできなかった．

(5)　『池田晃淵履歴』（明治4年）松前町町史資料室蔵．

(6)　松前藩が藩士を記録した数少ない史料に池田姓の者の存在を確認することができる．その最古の記録である寛政10年（1798）に作成された，「寛政十年家中及扶持人列席調」（松前町史編集室・編『松前町史』史料編第1巻第一印刷出版部　1974）には「池田喜三右衛門」が「町御役所書役」に，「池田豊右衛門」が「江差村御番所下代」の役職にみられる．「文化四年丁卯八年惣扶持並家数調扣帳，御用之間江御目付中差出候扣」（文化8年〈1811〉作成　北海道開拓記念館蔵近藤家文書）には「池田重蔵」が「町足軽」に，「池田豊右衛門」が「江差番所勤下代」に，「池田文蔵」が「江差番所子供勤」の職に就いている．嘉永6年（1853）に作成された「御扶持別列席帳」（前掲『松前町史』史料編第1巻所収）には「池田勝太郎」が「町役所書役在方掛」の役職に就いている．この史料には他に池田姓の者として「池田新左衛門」「池田連蔵」の名が見える．この三者は共に家格は「新組御徒士」とされている．しかし『池田氏由緒略書』にはこれらの名前は見られないため，池田晃淵の家系とはまた異なる池田も存在していたらしい．

(7)　田村安蔵「池田亜喃」（家臣人名事典編纂委員会・編『三百藩家臣人名事典』第1巻　新人物往来社　1987　7～8頁）．

(8)　①田端宏／桑原真人／船津功／関口明『北海道の歴史』山川出版社　新版県史1　2000　172～6頁，②北海道庁・編『新撰北海道史』第3巻　北海道庁　1937　54～71頁．

(9)　以下の記述は，①前掲『池田晃淵履歴』，②前掲『新撰北海道史』第3巻　54～71頁による．

(10)　廃藩置県の際に政府の調査により発覚した不正事件である．当時，館藩は多額の借金に悩んでおり一時的措置として藩首脳の共謀により行われた（前掲『新撰北海道史』第3巻　201～2頁参照）．なお，この事件を取り扱って研究した論文は管見の範囲内では存在しない．

(11)　①東京大学史料編纂所・編『東京大学史料編纂所史史料集』東京大学出版会　2002　555頁，②永原慶二『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館　2003　8～18頁

(12)　『修史館官員履歴』（明治9年）東京大学史料編纂所蔵．

(13)　以下の制度の変遷と池田の異同の記述は特に断りがない限り，『東京大学史料編纂所史　史料集』（東京大学出版会　2001.11）363～379頁を参考にした．

(14)　『史料蒐集復命書　秋田県』（明治31年）東京大学史料編纂所蔵．

(15)　前掲『東京大学史料編纂所史　史料集』379頁．

(16)　栗田元次『総合国史文献解題』（中）　国書刊行会1982（復刻版）　665頁．

(17)　栗田元次『総合国史文献解題』（上）　国書刊行会1982（復刻版）　14頁．

(18)　重野安繹（1827～1910）．歴史家．明治初期から修史事業に参加し，明治21年修史事業の帝国大学移管に伴い帝国大学文科大学教授．文学博士．後に貴族院議員，帝国学士院会員，史学会初代会長等を歴任した．重野は修史事業にあたって厳密な史料批判を行う近代歴史学の手法を導入した．その結果，『太平記』に登場する南朝の「忠臣」児島高徳は存在しないとし，南朝の系統が正統であると結論した．他にも『太平記』の楠木正成・正行親子の「櫻井駅の別」も史実ではないと否定した．これらのことは当時の国民が歌舞伎などから得られた「史実」として広く信じられていたため，重野は「抹殺博士」と呼ばれた．なぜかといえば，この当時の歴史学界の主目的は史料批判により事実関係を正確に解明することに主眼がおかれていたからである（①前掲永原慶二『20世紀日本の歴史学』34～36頁，②大久保利謙「重野安繹」〈前掲『国史大事典』第6巻　724～725頁〉）．

（平成15年9月30日受付）
（平成16年2月24日採録）